



験と縁



川崎ゆき

「験を担ぐ人がいますなあ」

「験ですか」

「縁起のようなものです。験がいいとか悪いとか」

「占いのようなのですか」

「そうですね。占いが廃れないのは先が読めないからでしょ。まあ、なるようにしてなるもので、また、ならないものです。最終的な結果は分かっているけど、その過程が分からなかったりします」

「先が読めないの、験を担ぐわけですか」

「判断が難しいときもそうですが、まあおおよそ分かるでしょ。どうすればいいのかが」

「そうですね。占わなくても、考えれば判断が付きますよ」

「頭ではそうでも、そのプロセスをこなす段になると、何か気が進まないとか、今はその時期じゃないと、先延ばしたりします」

「そうですね、頭では分かっているけど、行動が伴わないです。それに、自分で下した判断を疑い出したりします。間違っているのではないかと」

「要するに験担ぎとは、後押しなんです。背中を押してもらおうようなものです」

「運命のようなのですか」

「そこまで大袈裟なものではなく、一寸した流れでしょうねえ」

「流れ」

「現実の具体的な流れとは別に精神的な流れがあるのです。気が向かないとか、気が乗らないとか。まあ、気持ちの問題でしょう」

「それと験とはどう関係します？」

「これは神秘事です」

「はい、当然そうです」

「神秘事が欲しいのです」

「ほう」

「天意のような」

「啓示のようなものですね」

「験担ぎはもう一つの流れなんです。現実の流れとは別のね」

「験って、何でした？」

「縁のようなものでしょ」

「はあ、漠然としていますねえ」

「この縁起や験は、インスピレーションや直感とはまた違っています。具体的な流れの中に出て

来ます」

「ほう」

「それは連続した流れの中に出て来るのですが、順番です」

「順番。何の？」

「だから、あることをやっている、と思わぬ流れになることがあります。予定外、予想外のことが起こります。プログラムにはなかったようなプロセスが加わったり、次の過程へ移るとき、その幅が広すぎて、もう一段何かを入れないと飛び越せなかったりとかします」

「それはよくあることでしょ」

「現実とは、実際にやってみないと分からないものです」

「そうですねえ」

「想像していた話とは別の話になったり、違う過程を経て進むこともあります。動いた分、現実も変わるのです。ここです」

「え、どこです」

「動く前の現実と、動いてからの現実とでは、現実の様が違ってきます」

「そうですねえ。まあ、それぐらいは予測できるでしょ」

「ただ、その予測の幅が広いと、話の展開が違ってきます。先読みというのがありますが、それらは今の時点での未来で、一つ先の未来に踏み込むと、状況が違ってくるのですよ」

「それと験担ぎとはどう関係します」

「これは大まかな方向でしょう」

「験のいい方へ行くのがですか」

「それは占いで未来予測ではなく、縁が縁を呼ぶようなものです。縁の連鎖、これです。誰が作った物語かは分かりませんが、実によく出来たお話になります。これは全てが終わってから見ると、なるようにしてなったと思えます。そのなるようになるのですが、どうなるのかは最初は分からない。これをすると何が次に来るのかは分からなかったりします」

「そのお話しそのものが、よく分からなくなりました」

「ああ、すみません。先走ってしまいました」

「要するに、どういうことですか」

「世の中、なるようになるということです」

「それと験担ぎとはどう関係しますか」

「これはセンサーのようなものです。物事をやっているうちに色々問題が出て来たりします。そんなとき、縁起のいい方を選ぶ程度です。ただ、これは主観的なものですがね。悪いことでも

験のいいこととして受け取れることもありますから」

「まだ、何かよく分かりませんが」

「縁起の秘密は順番にあります。この順番、実に現実的です。それに身を任せるのがよろしいかと。一つ一つのエピソードには必然性があります。想像で作ったものではなく、自然に湧き出してくるのでしょうか」

「験の良さとは何でしょう」

「望んでいる方向を指し示す程度です。験は験を指し続けます」

「もう分からなくなりました」

「まあ、それらは気休めのようなものですよ」

「あ、はい」

了